

東流西流

素晴らしい！ 一つの写真を食い入るように見つめる人たち。

今年6月「林忠彦賞20回記念写真展」を川崎市市民ミュージアムにおいて開催した。周南市が創設した写真賞の20年の成果を関東圏の方に批評してもらおうのが狙い。「今」という時代性を尊重する本賞にとっては、一つの試金石である。幸い好評

有田 順一

のうちに閉幕。一定の評価は残せたものと思っ

徳山市（現・周南市）文化会館が開館。本格的な展示室も完備され郷土の文化や人物を紹介する事業が始まった。そこで真

写真の写の字もないところから出発し、今では

つ先に取り上げたのが、

「写真のまち・周南」と呼ばれるまでに

中央で華々しく活躍していた林であった。

なつた。どのよう

翌年、写真展「日本の

うにしてこま

家元」と講演会を開催。

できたのか。本

売れっ子の写真表現と生

連載を通してこ

の言葉に一同歓喜。最高

れまでの歩みを

峰の仕事に皆が酔いしれ

振り返ってみた

た。実は私もこのスタッ

い。

フの一員であった。しか

その大本となったの

が、戦後、銀座のバー「ル

パン」で泥酔する太宰治

ど長いお付き合いになる

の決定的瞬間を撮った本

とは夢にも思わなかった

市出身の写真家・林忠彦

のである。昭和57年、

美術博物館館長）

東流西流

周南市には明治期から続く写真館がある。林は大正7年に生まれ、その3代目と目されていた。しかし営業写真にはなじめず上京。当時、花形だった報道写真の世界へ飛び込んだ。

戦中は特派員として中国に渡りそのまま終戦。昭和21年東京に引き揚げ、すぐに写真活動を再開する。この頃、全盛を

有田 順一

誇ったカストリ雑誌で頭角を現し昭和22年に発表した「太宰治」で一躍の表舞台に躍り出た。その後には人物写真家として「日本の作家」「日本の画家」などを発表、新感覚の肖像写真は一世を風靡した。

後には人物写真家として「日本の作家」「日本の画家」などを発表、新感覚の肖像写真は一世を風靡した。そして平成2年、写真集『東海道』を完成、それを見届けるかのように同年暮れ旅立った。享年72歳。この国民的写真家の死は、すぐさま彼の故郷でも大きな決断を迫られることになった。(周南市、市美術館館長)

写真家・林忠彦とは

しかしその一方で風景写真にも挑戦。「長崎」「若き修羅たち」「若き修羅たち」など秀作を連発した。歴史の群像や事象を風景の中に織り込む独自の表現は風景的人物写真と呼ばれ高い人

東流西流

「巨星墜つ」。林忠彦死去の報に衝撃が走った。

平成2年すぐに畢生の作「東海道」が全国追悼展として動き出した。徳山市(周南市)では翌年4月に開催。感動は感動をよび各地各所で様々な顕彰事業の声が上がった。

その渦中、徳山市はいち早く、林の芸術性や記録性を後世に残すためにオリジナルプリントの収

集と写真文化の振興のため、全国対象の写真賞、林忠彦賞の創設を発表した。なかでも人気の高いの

まずオリジナルプリントの収集については、林の全時代の作品を網羅する方針がた。林の活動は戦中の報道写真時代「写真週報」「アサヒカメラ」、戦後の人物写真時代「日本作家」「日本の画家」、そして晩年の風景写真時代「長崎」「長州路」の三つに大別できる。現在は、1514点収集して

林忠彦資料の収集

本作家「日本の画家」、そして晩年の風景写真時代「長崎」「長州路」の三つに大別できる。現在は、1514点収集して

有田 順一

物館館長)

東流西流

全国規模の写真賞、林忠彦賞の創設。一地方都市からの発信事業であるため、体制づくりにはとりわけ神経をつかった。はじめに募集要項を決定。①対象 毎年1月から12月までに写真展、写真集、雑誌などで発表された写真表現のすべて②資格 アマチュア写真③テーマ 自由④原則として毎年1名に授与。等々

有田 順一

が主な骨子となった。

すでに新聞社系の木村伊兵衛賞と土門拳賞が写真賞の双璧といわれ、後発の賞はその中で生き残れるか否かが問われていた。

もう一つの顕彰事業

術のすべてを知る存在だった。また本人は「原節子」「吉永小百合」の代表作を持つ女性写真の大家で、名実ともにわが国を代表する写真家であった。

選考委員がその力ギとなることから、代表格の委員長は林の盟友である秋山庄太郎氏にお願いした。秋山氏は、昭和22年、銀座のバー「ルパン」で林と出会って以来、作家活動はもちろん日本写真家協会、二科会写真部などでも行動を共にし林芸博物館館長）

そして平成3年募集開始。待望の第1回は後藤正治氏の「西域シルクロード」が受賞した。雄大な自然とそこに生きる人々を捉えたフォトドキュメントである。しかし悲しいことにその後、民族紛争が激化。今では平時を語る貴重な記録としてさらなる価値を高めている。(周南市、市美術館)

東流西流

市民待望の徳山市（現・周南市）美術博物館が平成7年開館した。当地初の美術、写真、歴史の3部門からなる本格的な博物館施設である。

その顔となる収集の柱には、本市出身の写真家・林忠彦、洋画家・宮崎進、詩人・まど・みちおの3人をすえた。同時代に生きる全国レベルの作家という観点からである。

この3人を中心に「故郷から全国に発信する」がスローガン。

とくに林については記念室が設けられた。当時

は、東京都写真美術館の開館など博物館史上、

林記念室の誕生

写真が最も注目された時代であった。そんな中、林は安定的な人気を誇っていた。加えて平成3年からのオリジナルプリントの収集もほぼ完了。すでに基礎研究も進んでいたのが開室に結びついた。

内容は、太宰治の代表

作をものにした銀座のバー「ルパン」のカウンターを再現、これを囲むように代表作品、解説パネル、写真機、愛用品等が並び、その業績を多面的に見ていただくのが狙いである。

コンセプトは「写人皆師」の一言。聞き慣れないが、これは写真を愛する人々を敬う林の作った造語。嬉しいことに、そんな林の心情に触れる場所として今では全国の写真ファンから聖地と呼ばれるようになった。

（周南市、市美術博物館館長）

有田 順一

東流西流

写真賞は生き物である。10回を超えたあたりから運営方針と現実とのギャップが出始めた。

最大の原因は急激なIT化。平成13年デジタルカメラの販売台数がフィルムカメラを上回った。加工ソフトの使用も当たり前になった。写真そのものが未知の世界へ突入したのである。

そんな中、悲劇が襲っ

有田 順一

た。平成15年第12回林賞 公民館での写真を取り入
選考委員会の席上、委員 れた企画などその波は市
長の秋山庄太郎氏が倒 内全域に広がっていい
れ、夕刻急逝。最大の支 だ。当館でも、オールドリ
援者を失うとともにフィ ー・ヘップバーン展、星
ルム時代の終焉^{しゆうえん} 野道夫展、立木義浩展な
を予感させる悲 ども現代写真を積極的に紹
しい出来事とな 介しその普及に努めた。

第10回林賞を境に

一方、地元で 取り組みが認められたの
は林賞10回を記 か、平成18年、山口県で
念して写真愛好 開催された国民文化祭で
家らにより街中 周南市が写真会場となっ
に写真を展示す た。国民行事の一翼を任
る「徳山フォト される榮譽。まさにこれ
エキシビジョン」が立ち が描いていた「写真のま
上がった。さらには「子 ち」への飛翔の姿であっ
どもフォトスクール「こ た。

ども街中写真展」など子 (周南市、市美術博物
ども向けの催し、支所や 館館長)

東流西流

「写真のまち構想」を牽引してきた林忠彦賞。平成17年第14回あたりから応募数が伸びなくなつた。

デジタルへの対応、現代美術家の参入、プロ枠が無いなど課題が山積。これは早く新しい方針を出さないと大事になると直感した。

選考委員を中心に幾度も協議を重ね、林忠彦が

有田 順一

登場した昭和20年代の彼の姿に照準をあわせたらどうかになった。時代の寵児と呼ばれ、一時代を象徴する作品を数多く発表した時期である。成明氏の「ロマンティックク・リハビリテーション」が受賞した。そこには現在リハビリ中の20の人間物語が写っていた。まさに今が刻印されていたのである。

継続は力

第18回からはズバリ、今、現在をとらえた「旬」の写真を選出するに方針を改めた。そのキャッチフレーズが「社会は心を撃つ写真をさがしています」。この大きなテーマに臨むためにプロ・アマの枠を外し自由化した。

「社会は心を撃つ写真はさがしています」。この大きなテーマに臨むためにプロ・アマの枠を外し自由化した。

注目の第18回は、大西館館長）
(周南市、市美術博物館)